

**栗原地区研究まとめ**  
**「生活で活用できる力」の育成を目指して**  
**～「つながり」を生かす指導の工夫～**

栗原地区教育研究会技術・家庭科部会  
栗原地区研究部長  
栗原市立志波姫中学校 教諭 小野寺 かおり

## 1 はじめに

平成28年度の栗原地区の技術・家庭科教育実践においては、前年度までの宮城県の研究主題である『「生活で活用できる力」の育成を目指して～「つながり」を深める指導の工夫～』で研究してきたことを踏まえ、特に「つながり学習」の3年目の集大成を意識しながら、本年度の宮城県研究副題である『「つながり」を生かす指導の工夫』に焦点を絞って、研究を進めてきた。さらに今年度の技術・家庭科研究会東北大会と県大会における家庭分野の研究発表に向けて、栗原地区での研究のまとめを行った。学校の実態に応じ、少ない部員数ではあるが、意見交換をしながら、研究発表に向けた研修会に取り組んできた。

## 2 研究のねらい

技術・家庭科の教育目標及び宮城県の研究主題に迫るために、各校での教育実践において、学習内容が家庭生活や社会生活に関連していることを明確にし、将来的な実践につながる「生活で活用できる力」をはぐくむ学習活動を探る。

## 3 研究の方法と計画

### (1) 研究の方法

- ① 栗原地区での技術・家庭科役員会を通じて、研究の方向性を検討し、会員各自が研究主題に沿った実践研究を主体的に進める。
- ② 研究会や研修会に積極的に参加し、自己研究を深めるとともに、会員相互の研修を深める。
- ③ 授業研究や話題提供を中心にした研究会を設け、実践研究や成果を持ち寄って研究を深める。

### (2) 研究の計画と経過

月	会名	会場	主な内容
5月	総会	岩ヶ崎小	研究計画
7月	役員会	栗原西中	研究推進
9月	一斉研究日	栗原西中	話題提供・研究協議
1月	研修会	栗原西中	伝講・次年度計画

## 4 研究の概要

### (1) 一斉研究日

平成28年 9月9日(金)

「東北地区中学校技術・家庭科教育研究大会課題別(A家族・家庭と子どもの成長)分科会の発表」における事前検討会

発表者 築館中学校 教諭 佐藤 智恵

執筆者 志波姫中学校 教諭 小野寺かおり

助言者 栗原西中学校 教頭 小野寺 春樹

本県では、研究の具体的な方法として、「気付く」「考え、学ぶ」「生かす」の3つの段階を踏んだ学習を「つながり学習」と定義している。そこで、今年度は特に、「生かす」段階について、地区の家庭科教員が共同で研究を進めた。

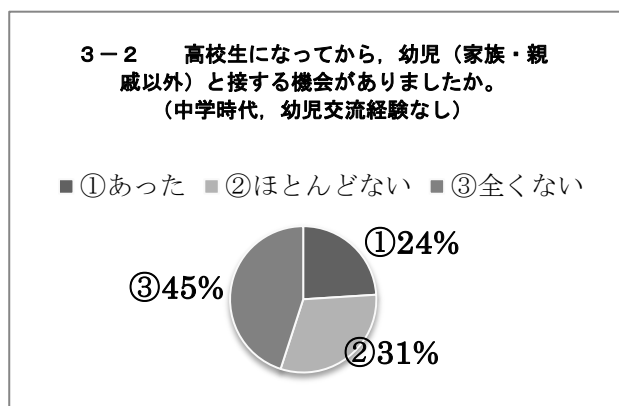
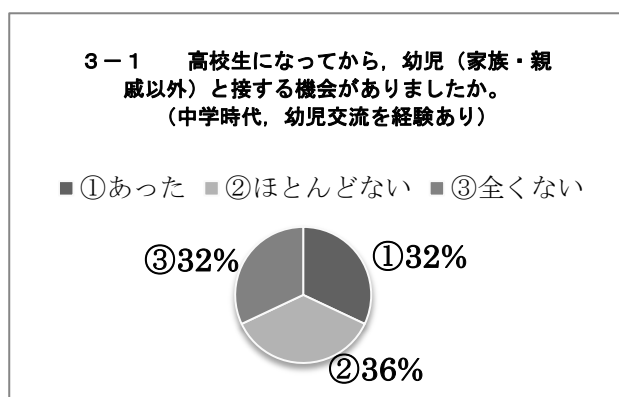
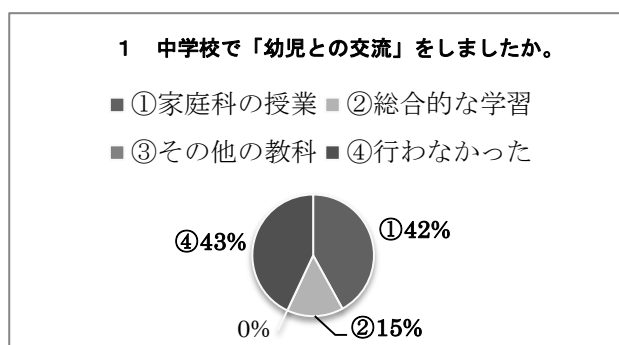
### (2) 「生かす段階」の実践事例

生徒は、幼児と楽しく交流するために、放課後等を利用し、積極的に準備をして「幼児との触れ合い体験」に臨むことができた。また、幼児が楽しめる遊びを考えたり、観察のポイントを事前に抑えていたことで、課題意識を持って、積極的に幼児と触れ合うことができたと考える。

事後指導として、「幼児との触れ合い体験」で学んだことをまとめさせ、発表会を実施した。発表会の時間が取れない場合には、生徒がまとめたものを掲示することで、3年間の学習内容に見通しを持たせたり、先輩からのアドバイスを後輩が引き継ぐことで、次年度の動機付けとした。

さらに、家庭や地域のつながりを深めるため、学級通信や市内の新聞店が発行する「地域新聞ニュース」に、触れ合い体験の様子を記事として掲載してもらった。この発信をきっかけとして、自分が役に立ったという肯定感を持たせ、再度、幼児や家族と主体的に関われることを目指した。

また、本地区にある高校（普通科2校）に通う1年生（現在2年生152名）を対象に「幼児との関わりに関するアンケート」をお願いし、経年変化を読み取ることにした。（ここでは抜粋したアンケート項目を載せる。）



高校生を対象としたアンケート結果から、中学時代に幼児交流を経験した生徒の方が、中学時代に幼児交流の経験がない生徒と比べ、幼児と接する機会が多いことが分かった。このことは、中学時代の「幼児との触れ合い体験」という実践的・

体験的な学習を通して、幼児への関心が高まり、幼児と接することに対して、抵抗がなくなったためと考える。そして、年月が経っても、中学時代の「幼児との触れ合い体験」で培った知識や技能を、実際の生活に生かしていることが分かり、その成果が実証されたと考える。

高校生対象のアンケートから、43%の生徒が「幼児との触れ合い体験」を中学時代に、全く経験していないということが分かった。よって、今後の課題は、教育的効果が高いと示されながらも、「幼児との触れ合い体験」の実施が難しいという現状を打破する方策を探していくことである。

少子高齢化が深刻になり、益々、幼児と接する機会がなくなっている状況だからこそ、家庭や社会とのつながりを重視しながら、この問題に関して、さらに研究を深めていくという努力が必要だと感じた。

### （3）指導助言から

今回の研究発表では、「生かす段階」の見取りの工夫として、高校生にアンケートをとり、追跡調査を実施し、考察している。アンケートのデータとして、さらに説得力を高めるために、高校生が中学校時代と比べ、幼児に対する捉え方や関わり方に変容が見られたということ、高校生の記述内容だけでなく、数字のデータとして示せばなお良かった。

## 5 終わりに

今年度は東北大会・県大会において家庭分野A「家族・家庭と子どもの成長」の発表の機会が与えられた。そのため、地区の技術・家庭科部会を多く開催し、研修内容を充実することができた。

さらに、県大会等の研究会や地区の研修会に積極的に参加することで、会員相互の自己研鑽にもつながり、今後の地区としての研究の方向性を共有できたと考える。

29年度には宮城県大会が栗原地区を会場に開催されることになっている。県や地区の研究の視点を踏まえ、地区の会員が一丸となって、一層の研究を進め、来年度の公開授業でその成果を発表できるように努力したい。